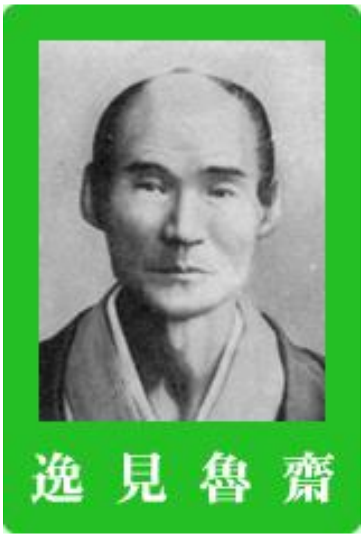

逸見 魯齋（へんみ ろさい）

弘化３年（1846)、西里村白山堂（現河北町西里）の逸見庄左衛門家に生まれました。父は達斎、母は青柳氏で、幼名を時之助といい、後に白山・三省などと号しました。

幼くして同村天満の江端忍や楯岡湯沢（現村山市）の菅原道行（万蔵）に学びました。

文久３年（1863）４月、18 歳の時に本沢竹雲に同行、安井息軒の三計塾に入り、漢詩を大沼枕山（ちんざん)、書を桑野松霞に師事し、谷干城や米沢出身の雲井龍雄らと交友を深めました。

しかし、この上京を父は許さず仕送りがなかったため、苦労の多い３年間を過ごさなければなりませんでしたが、その勉強ぶりを柴橋代官林鶴梁は「逸見生は尋常の書生にあらず」と称賛したのです。

慶応元年（1865)、魯斎は帰郷し、自宅に「筆学稽古所」を開き遠近の多くの子弟を育てましたが、これが明治８年（1875）以降の西里学校へと発展していったのです。

こうした間にも、魯斎は詩作や書に励み、21 歳の時に隅田川の舟遊びを詠んだ「墨江春遊」は、特に優れた作品として岡鹿門に激賞されたといわれています。

同 11 年（1878)、本沢竹雲が貫津（現天童市）の格知学舎に翠濤吟社を開くと、魯斎は長男の松雲と西川菊畦を伴って月例会に参加、詩作に励みました。これらの漢詩はやがて『指翠堂絶句鈔』としてまとめられるのですが、魯斎はそれを待たずに、同 32 年 53 歳の若さで亡くなってしまいました。